The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	接続助詞化した「～うえで」形式の意味・機能
Author(s)	方, 允炯
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2004, 38, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56525
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

接続助詞化した「～うえで」形式の意味・機能

方　　允炯

1. はじめに

現代日本語の「うえ」は、「空間を表す形式名詞」として働くのが基本的な用法である。「上から塩を振り掛ける」のように、単独の形で使用される場合もあるが、「机の上に本を置く」のように、ノ格の名詞と組み合わさって、その具体名詞を基準にした空間的な位置関係を表す場合の方が多い。形式名詞の場合は「机の上を」「机の上に」「机の上で」「机の上から」のように、格体系が揃っている。

ノ格の名詞の意味が抽象化するにつれて「うえ」の特定の格の用法が特殊化し、〈後置詞〉化していく場合がある[1)]。この場合は、「実生活の上で苦労する」「十二人の人質のうえに、六億立方メートルのダムの水までを彼らは手中に握っている」「住所・氏名・年齢をご記入の上、お送り下さい」のように、「～のうえで」「～のうえに」「～のうえ」の形に限定される。ただし、「～のうえから」も少数ではあるが出現する。

また、動詞や形容詞に接続して、〈接続助詞〉化していく場合もある。この場合でも、〈後置詞〉化の場合と同様に、「A案を修正した上で採用する」「疲労と栄養不足が重なった上に、精神的なショックで昏睡状態になった」「本人の承諾を得たうえ、その全文を紹介する」のように、「～うえで」「～うえに」「～うえ」の形に限定される。ただし、「～うえから」も少数出現す

る。これらは、形式的な観点から言うと、次のように分けられる。まず「～うえで」は動詞のシタ形式に接続する「シタうえで」と動詞のスル形式に接続する「スルうえで」があり、「シタうえで」は「シタうえ」の形でも用いられる。次に、「～うえに」は動詞・形容詞・名詞述語に接続するが、「～うえ」の形でも用いられる。

本稿では〈接続助詞〉化した「～うえで」について分析する。まず、「～うえで」形式についての重要な先行研究としては、森田（1980）と田中（2004）がある。

森田（1980）は、「うえ」の意味の全体を詳しく記述している。空間的用法と非空間的用法とを分けて記述しているが、非空間的用法については、「「上」が“ある事物がすでにあるのに、それに重ねて”の意を持つところから、ある状態がすでにあることを前提として、そのうえでさらに別の事柄を考えていく気持ちのとき「上」を使う」としている。詳しい意味記述がなされているが、具体的な従属文（あるいは従属句）と主文の特徴については言及していない。

田中（2004）は、接続助詞化した「うえに」「うえで」「うえは」について、それぞれの意味と機能を、他の類似的表現との比較検討を行ないながら考察している。「うえで」については、大きく動作・行為の「時間的前後関係」を表す用法と「方面・媒介」を表す用法との二つに分けて記述している。主要な点をまとめると以下のようになる。

ａ．「時間的前後関係」を表す用法：ある一次的な動作・行為が完結、完了したあとに、それをふまえた二次的な動作・行為が時をおかずして継起する状況を周到に、あるいは確認的に説明した言い方。動詞のタ形に接続するという点でも「あとに」に類似しているが、単に動作行為の前後関係、継起をあらわすのではなく、ある完結した行為の遂行にあた

ってのある種の処理、手続きの要請を示唆する点において、特徴がある。「ウエデ」の前後に位置する内容については見越し、ないし、相補的な価値判断が常に介在する。「テカラ」「アトデ」と比べて明らかに意図的、準備的な事態遂行に際しての熟慮がなされている。こうした特徴から＜ウエデ＞は時事的な報道文にあらわれることが多く、「～をふまえて」「～にもとづいて」「～をうけて」などの動詞派生の後置詞と同じように、前件と後件の必然的関連、事態の累積性が見出される。

b．「方面・媒介」を表す用法：英語では as far as..., be concerned... のように、関連する方面や場合を表す言い方で、「～において」に言い換えられる。「ウエデ」の前接部分には動詞文がきて、後件の述語成分には「重要だ」「役に立つ」「参考になる」などの見込み上の価値判断があらわされる。「ウエデモ」「ウエカラモ」などのように取り立てが可能で、目的をあらわす附帯状況としても認識される。前接部分は基本形（ル形）を原則とする。

田中の研究においては、「～うえで」はa.とb.のような2つの用法を有しており、その2つの用法では従属文と主文の述語の形やタイプが異なることが指摘されていて、重要である。

以上のような先行研究を踏まえながら、本稿では、〈接続助詞〉化した「～うえで」形式の意味・機能について、「シタうえで」、「スルうえで」の順に記述していきたい。

2．「シタうえで」形式

形式面からみて、この場合の特徴は、下記の3点である[2)]。従って、「政府はCO_2排出総量を決めた上で、排出許可証を発行した」とは言えても、「CO_2排出総量が決まった上で、政府は排出許可証を発行した」とは言えないのである。このような特徴は、後述の「スルうえで」の場合には見ら

れない。

① 主文の述語は、基本的に〈意志動詞〉である。

② 従属文の述語も、基本的に〈意志動詞〉である。

③ 主文と従属文の〈主体〉は、同一である。

意味・機能上は、下記に示すような2つのパターンがある（2.1、2.2）。両者は「従属文の動詞が、主文の述語が表す動作にとって、〈前提条件〉となる動作を表す」点で共通しているが、従属文が表す動作が主文の動作に時間的に先行しているか否かによって、大きく2つのパターンに分かれるようである。

2.1 〈前提条件〉となる動作が時間的に先行している場合

このパターンは、従属文が表す動作が時間的に先行していることが、主文の意志的動作の遂行にとって前提となることを表している。

1) 出火場所周辺の燃え殻という燃え殻を、大きさで分類し、一見しただけでは判別がつかないような細かいものに至るまで、全てを集めた上で、滝沢たちは、ようやく昼過ぎに署に戻った。（牙：46）

2) 講演の中では、ここで述べた内容を紹介した上で、俳句もしくは三行詩を創作する課題を課した。（プロ：94）

3) 虹に限らず、そもそも辞書に見られる語彙の記述とは、辞書の編集にたずさわる人々が、いろいろな言語資料を直接に検討した上で、自分たちの考えをまとめたものを書くのが、本来のあり方というものであろう。（日本語：71）

4) 計算を間違えました、と報告して、しっかりしろよと苦笑まじりの忠告を受けたけれど、心配したほどの叱られ方はしなかった。上司にしてもそれぞれ書類に目を通した上で捺印しているのだから、ミ

スを見逃した責任を感じていたのかもしれない。(働く)

5) 複雑な成育史から内攻的な分裂気質をもった彼が、失恋のショックなどで心因反応を時々起したことは事実としても、遊興費のための使いこみに困って、共犯の麻雀仲間二人と手はずまで打合せた上で殺害したという合目的な彼の犯罪を、分裂病のせいにすることは、どだい無理なことであった。(犯罪)

次の例のように「まず」「さきに」「あらかじめ」などのような副詞と共起して、意志的動作の順序を明示する場合もある。

6) この本では、このような最近の進化論の現状をくわしく説明したいと思っている。まずダーウィン進化論と、その流れを正統的に継承した総合進化説を解説したうえで、中立進化説、連続共生説、ウイルス進化説といったまったく新しいタイプの進化説を紹介しよう。(進化論)

7) 先に主治医のもとを訪ね、面接の許可をとった上で一人一人から事情を聴取したが、彼らはだいたい似たようなことしか言わなかった。(牙：69)

8) もっとも、そうした事態の到来を予め見越した上で、計画期間末に大儲けすることをねらって、初期の段階から排出削減に努める国もあるはずである。(地球：188)

文体差を別にすれば、上記の1)～8)の例は、「シテカラ」に言い換えられる。「シテカラ」について、言語学研究会・構文論グループ（1988a）は、「先行性」の関係を表現しているものと、時間・状況的な関係を表現しているものとの2つに分けて記述している。主文の述語の出来事が動作である場合は「先行性」の関係を表現するが、「ある一つの出来事は、もう一つ

の、他の出来事が先行しているという条件のもとで、実現するとすれば、先行する出来事はなんらかの意味で、後続する出来事を条件づけている」としている。

ただし、「シテカラ」は、〈主体〉が同一である必要がないので、同一主体の場合に限って、どちらを使用してもいいという場合が起こるのである。また、「シタうえで」のほうが、「シテカラ」よりも、〈前提条件〉であることを明示することになると思われる。次の例のような場合は、「シテカラ」よりも「シタうえで」の方が適切だろう。

9) 中用量ピルを使っての緊急避妊法（モーニングアフターピル）まで紹介し、小田先生は、「多様な避妊法を知った上で、自分は何を選択するのか考えましょう」と、授業を締めくくった。(アエラ2001.11.5：42)

10) そのような従来の歴史学のあり方を全面的に批判した上で、上原教授は新しい歴史学のあり方を講義されたのである。(学問：57)

一方、「シタあと（で）」は、時間関係のみであって、〈前提条件〉といったような条件付けの関係は表していない。「シタうえで」とは違って、従属文の述語と主文の述語は〈意志動詞〉に限定されず（例11)、また、「シテカラ」と同様に、従属文と主文の〈主体〉は同一である必要がない（例12)。

11) タケの花が咲いた後、米粒よりぽっくりと太った栄養たっぷりの種子が、たくさん、イネの穂のように実る。(つぼみ：95)

12) 大城が出ていった後、私はクーラーを停めた。(銀行：288)

2.2 〈前提条件〉を表す場合

このパターンは、従属文の動作と主文の動作との時間的前後関係ではな

く、従属文の動作が主文の動作の〈前提条件〉であることを表している。「～を踏まえたうえで」、「～を考慮に入れた上で」、「～を前提としたうえで」、「～を計算に入れたうえで」、「～を仮定した上で」などのように、具体的動作ではないことが特徴である。この場合は「シテカラ」に言い換えることができない。

13) この原則をふまえたうえで、これを現代社会の複雑な取引社会の実態に適合的な法律論として論理的に構成し直すことが必要となっている。(法：49)

14) したがって、日本人の社会生活のあり方として、いかなる人の場合も、なんらかの小集団的世界をもっているのが常で、それが欠くことのできない重要性をもっている、そこで、これらの具体的なケースにみられるバリエーションを考慮にいれたうえで、本論では小集団所属が明確な場合を典型として論をすすめているのである。(力学)

15) これに対し、官僚（企業ジュリストを含む）の法律学は、他者の決定した結論を前提としたうえで、その結論の法律適合性を論理的に正当化するための技術である(これを官僚法学という)。(どう：113)

16) ダムは重力式、アーチ式の種類を問わず、壁面にかかる湖水の途方もない重量を計算に入れたうえで、充分な強度が得られるように設計されている。(ホワイト：188)

3. 「スルうえで」形式

この形式の場合は、「シタうえで」の場合と違って、次のような特徴を持つ。

① 主文の述語は、＜評価＞に関わる形容詞述語が中心である。

② 従属文の述語は、〈意志動詞〉が中心である[3)]。

③ 主文の述語が評価形容詞であることと関わって、「スルうえで」は、〈評価の側面・観点・基準〉を表す。

述語の意味的なタイプは下記のように分類できる（a.～e.）。形式上は、動詞や名詞あるいはモダリティー形式であっても、意味的には、評価に関わる形容詞文に近いことに注意しなければならない。厳密な分類とは言い難いが、量的に多く見られたタイプから提示していくことにする。

a.「必要だ」系のタイプ

・「必要（不可欠）だ」「必須だ」「～しなければならない」「～しなくてはならない」「欠かせない」「見逃せない」

17) 第二に、しぐさの研究こそは、わが国の文化を理解するうえで、言語の研究と同様、もしくはそれ以上に必要であることを示唆している点である。（まなざし）

18) 道徳とは、簡単に言えば、人間が生きてゆくうえで守らねばならない規則の総体である。（子ども：167）

19) 自己資本によるか、外部資本によるかを問わず、資本形成は国や社会を建設していく上で欠かせない。（プロ：41）

b.「重要だ」系のタイプ

・「重要だ」「重要なことだ」「重要なポイントだ」「重要な意味（機能）をもつ」「重要な材料（手がかり）となる」「大切だ」「大切なことだ」（「大切な研究（問題）だ」「貴重だ」「鍵を握っている」「大きい価値をもっている」

20) このように、形とか内容は同じであっても、その仕方、運び方が違

うということは、社会の質を知る上でたいへん重要なのである。(タテ)

21) リーは証拠物件の管理連鎖をしっかりと記録し保存することは、分析結果の科学的合理性とともに、鑑定の品質を保証するうえで大切であると、いつも主張していた。(捜査：94)

22) これは中世ヨーロッパの人々の世界観、宗教観を知る上で貴重である。(プロ：54)

23) 裁判規範というレベルでも、今後の裁判例でしだいに具体化するであろうが、裁判官の決定を動かしてゆくうえでも、消費者運動や世論の高まりが鍵をにぎっている。(どう：59)

24) 一見、負の価値のように見えるものが、実は個性を伸ばすうえで、大きい価値をもっていることもあるのだ。(子ども：41)

c. 「効果的だ」系のタイプ

・「効果的だ」「役立つ」「有効だ」「有利だ」「有意義だ」「示唆的だ」「示唆に富んでいる」

25) すでに白馬岳や八ヶ丘に登っていたというから、山についても先駆者の一人といえるが、彼の存在は山岳会の社会的信用を高めるうえでたいへん効果的であった。(登山：138)

26) 私も患者として、無影燈の下で手術を受ける立場にあった経験が、麻酔科医としての医療を行っていく上で随分と役にたった、と実感している。(麻酔：230)

27) これを基にして、効果的な教授法が考え出されたり、発達の段階が設定されたりすることは、子どもを全体として捉え、それにいかに教えるかを考えるうえで、相当に有効である。しかし、これをもっ

てすべてであるとは考えないことが大切だ。(子ども：50)

28) これは、群のなかの権力闘争をめぐる社会的関係の複雑さによって、大脳新皮質が発達したという仮説だ。同じ群のなかの他者がどう行動するかを予測し、それに応じて適切に行動すれば、食物や異性を獲得する上で有利になる。(IT：114)

29) これは裁判の市民的すそ野を拡げる上で非常に有意義な運動であるが、それにしても、民衆の住む近いところに裁判所が存在していなければ傍聴もできない。(どう：130)

30) それにもかかわらず、この西田の「無の場所」という考え方が、実は同時にわが国の伝統的な神々のあり方を考えるうえでも、きわめて示唆的ではないかと私は思う。(仏)

31) このようなエタックという名の航海術は、現代ならびに近未来の情報社会を考える上で示唆に富んでいる。(プロ：57)

d．「難しい」系のタイプ

・「難しい」「難関だ」「問題がある」

32) 「同じアジア人だ」などというが、日本人にとって仕事をしていくうえで、特にはじめの段階で適応がむずかしいのは欧米よりもアジア諸国である。(適応)

33) 雇用の調整は構造改革を推進するうえで最大の難関であるが、必要なことは、経済全体として雇用を確保することである。(日本経済：154)

34) 歴史的風土や文化遺産を守るうえで，どのような問題があるか考えよう。(地理)

e．「制約がある」系のタイプ[4)]

・「制約条件がある」「いろいろな規則がある」

35) プロジェクトを進める上ではさまざまな制約条件がある。(プロ：112)

36) インドでは、家族生活をするうえで、その成員、個々人の地位によって、ずいぶんいろいろな規則があるが（たとえば、妻は夫の兄・父に対しては直接顔を見せたり、話をしてはいけないというような)、それらはみな個々人の行動に関するものであり、またその規則は各家によって異なるものではなく、社会全体（詳細には各カースト成員間）に共通するものである。(タテ)

以上の例から分かるように、この形式は、「Aは〔B（スル）うえで〕C」という構造をなしている点が特徴的である。この場合、Bは、「AがCである」という評価に対する〈評価の側面・観点・基準〉を表す。例えば、「証拠物件の管理連鎖をしっかりと記録し保存することは、鑑定の品質を保証するうえで大切である」のような構造が考えられる。「証拠物件の管理連鎖をしっかりと記録し保存すること（A)」について、「大切である（C)」という評価を下しているのであるが、それは「鑑定の品質を保証する（B)」という側面・観点・基準においてであるという意味を表しているのである。これは「スルうえで」形式の特徴であり、「シタうえで」形式には見られない。

なお、主文の述語が、上述のa.「必要だ」系のタイプの場合には、「～タメ（ニ)」と言い換えられる。この点に関連して、黄（2000）は、〈接続助詞〉化した「～タメ（ニ)」の用法のうち、主文の述語が評価を表す場合には、単なる目的ではなく評価基準の意味が付け加わると指摘している（例37)。この点についての具体的な分析は今後の課題である。

37)「僕の言う意味はね、いい作品を書くためにああいう生活が必要だったのじゃなく、どんな生活からでも、真にすぐれた作品を書き得るということさ。(草の花)」

4. まとめと今後の課題

4.1 まとめ

以上、本稿で述べてきたことをまとめると、次のようになる。

① 空間を表す形式名詞が〈接続助詞〉化した「～うえで」形式では、従属文の述語は動詞のシタ形式、スル形式に限定されている。

② 「シタうえで」形式は、主文が表す意志的動作の〈前提条件〉を表し、「スルうえで」形式は、主文が表す評価に対する〈評価の側面・観点・基準〉を表す。

③ 「シタうえで」形式と「スルうえで」形式に関する従来の研究では、継起関係か同時関係かという時間的側面が取り上げられることが多かったが、継起関係を表すのは、「シタあと（で)」と「シテカラ」のような形式である[5]。このような形式との関係上、「シタうえで」は、むしろ〈前提条件〉という条件付けの関係が強調されていると思われる。また、「スルうえで」形式は、主文が評価に関わっていることから、時間性は持たない。

4.2 今後の課題

最後に今後の課題を挙げる。

① 空間を表す形式名詞「うえ」の本来的意味が、文法化にあたって、どのような漸次的プロセスを経て、以上のような文法的意味・機能を持つようになったかを、精密に記述していく必要がある。

② その場合、出発点的な「うえ」の意味のどの側面が漂白され、どの

側面が保持されているかを取り出しながら、分析していくことが必要である。

③　本稿で扱った「シタうえで」と「スルうえで」については、〈後置詞〉化の場合も視野に入れて、より総合的に分析していくことが必要である。

注

1)　＜後置詞＞について、鈴木（1972）は「単独では文の部分とはならず、名詞の格の形（およびその他の単語の名詞相当の形式）とくみあわさって、その名詞の他の単語に対する関係をあらわすために発達した補助的な単語である」と定義している。

2)　次のように、主文の述語が無意志動詞である例が確認された。このような用例の位置づけについては、今後、より詳細に見ていきたい。

・「冬の寒さを感じるという条件を満たした上で起こるのだ。（つぼみ：69）」

3)　従属文の述語は基本的に意志動詞であるが、無意志動詞の場合も１例だけ確認された。意志的動きに近いものとみなすことができるかも知れない。

・「ミミズはボロボロになった枯葉や雑草などの有機物を、土とともに食べて生きている。ミミズの体中を通過したそれらのものは、食物が育つ上で、とても良質な物質となって、地上に蓄積されていく。（みみず）」

4)　この他に、以下に示すような、a.～e.のタイプに入らない例が確認された。

・「視線を合わすということは、わたしたちが人間関係を結ぶうえで、もっとも基本的なしぐさのひとつであろう。（まなざし）」

・「こうした社会的責務を十分に果たしていくうえで、「信用を重んじ堅実を旨とする経営」は、どのような時代においても銀行経営の原点であると考えます。（企業）」

・「しかし、本論で問題とする集団構造の見地からみると、そうした政治的・歴史的背景の相違にもかかわらず、株仲間の構造は中国のギルドと比較しうるものであり、日本社会における集団構造を考察するうえで、興味ある諸相を提供してくれるものである。（人類：284）」

・「下位集団とは、個人が生きていくうえで最も関心があり、直接の利害関係があり、信頼すべき人々を見出せる範囲ともいえよう。(人類：60)」

5) 砂川（2000）は、「スルうえで」形式について、「パソコンを買う上で注意しなければならないことは何ですか。」のような例を挙げ、時間的には同時点を、意味的には累加や必然性を表すとしている。しかし、主文の述語のタイプから言って、「シタうえで」は「以降」、「スルうえで」は「同時点」を表すといったような時間的側面を取り上げた分析ではなく、〈評価の側面・観点・基準〉といった分析の方が適切であると思われる。

用例出典

＊本文中は略称（下線部）で示す。

〔小説〕

乃南アサ（1996）『凍える牙』新潮文庫（2001）、江波戸哲夫（1992）『銀行支店長』講談社文庫（1995）、真保裕一（1995）『ホワイトアウト』新潮文庫（1998）

〔論述文〕

西垣通（2001）『IT革命 ── ネット社会のゆくえ ──』岩波新書、阿部謹也（2001）『学問と「世間」』岩波新書、河合隼雄（1992）『子どもと学校』岩波新書、瀬田季茂（2001）『科学捜査の事件簿 ── 証拠物件が語る犯罪の真相 ──』中公新書、佐和隆光（1997）『地球温暖化を防ぐ ── 20世紀型経済システムの転換 ──』岩波新書、田中修（2000）『つぼみたちの生涯』中公新書、小泉武栄（2001）『登山の誕生』中公新書、渡辺洋三（1996）『日本をどう変えていくのか ──「改革」の時代を考える ──』岩波新書、野口悠紀雄（1999）『日本経済再生の戦略 ── 21世紀への海図 ──』中公新書、鈴木孝夫（1990）『日本語と外国語』岩波新書、金安岩男（2002）『プロジェクト発想法』中公新書、渡辺洋三（1986）『法を学ぶ』岩波新書、土肥修司（1993）『麻酔と蘇生 ── 高度医療時代の患者サービス ──』中公新書

〔雑誌〕

アエラ：朝日新聞 weekly『AERA』2001.11.5号　朝日新聞社

〔CASTEL/J CD-ROM〕（日本語教育支援システム研究会）

下川浩一『日本の企業発展史』（講談社・現代新書）、中原英臣／佐川峻『進化論が変わる』（講談社・ブルーバックス）、中根千枝『タテ社会の人間関係』（講談社・現代新書）、『新しい社会　地理　2編』（東京書籍発行）、中根千枝『適応の条件』（講談社・現代新書）、黒井千次『働くということ』

（講談社・現代新書）、中村希明『犯罪の心理学』（講談社・ブルーバックス）、山折哲雄『神と仏』（講談社・現代新書）、井上忠司『まなざしの人間関係』（講談社・現代新書）、中根千枝『タテ社会の力学』（講談社・現代新書）

参考文献

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト ── 現代日本語の時間の表現 ──』ひつじ書房

言語学研究会・構文論グループ（1988a）「時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文(1) ── つきそい文が「してから」のかたちをとるばあい ──」『教育国語』92　むぎ書房

────（1988b）「時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文(2) ── つきそい文が「したあと」のかたちをとるばあい ──」『教育国語』93　むぎ書房

言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房

黄意雯（2000）「現代日本語における「～タメ（ニ）」形式の意味・用法と使用実態」『国語学会平成12年度春季大会要旨集』国語学会

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

砂川有里子（2000）「空間から時間へのメタファー ── 日本語の動詞と名詞の文法化 ──」青木三郎・竹沢幸一編『空間表現と文法』くろしお出版

高橋太郎（1994）『動詞の研究 ── 動詞の動詞らしさの発展と消失 ──』むぎ書房

高橋太郎ほか（2001）『日本語の文法』講義テキスト（未公刊）

田中　寛（1999）「接続助詞化した形式名詞「ウエ」の意味と機能」『語学教育研究論叢』16　大東文化大学

────（2004）「形式名詞「ウエ」の意味と機能 ── 累加的な接続成分について ──」『日本語複文表現の研究 ── 接続と叙述の構造 ──』白帝社

日野資成（2001）『形式語の研究 ── 文法化の理論と応用 ──』九州大学出版会

森田良行（1980）『基礎日本語２』角川書店

李　活雄・張　麟声（2001）「日本語の「(の) 上」と中国語の「上」をめぐって」『日本語学』20－1　明治書院

（大学院後期課程学生）

SUMMARY

The Meanings and Functions of "*-uede*" as a Conjunctive Particle

Yoonhyung BAHNG

"*-uede*" appears with only two verb forms: "*shita*" and "*suru*". It has been pointed out in previous studies that "*-uede*" has two distinct meanings and functions and that the type of the predicate of the subordinate clause and main clause differs accordingly. In this paper, I would like to observe how "*shita-uede*" and "*suru-uede*" serves in greater detail.

Firstly, "*shita-uede*" has the following three characteristics: (1) The predicate of the main clause is basically a "volitional verb", (2) The predicate of the subordinate clause is basically a "volitional verb", (3) The main clause and the subordinate clause have the same "agent". The verb of the subordinate clause works as "*zentei-joken*" [prerequisite] to the action in the main clause. "*shita-uede*" demonstrates two patterns of the subordinate clause and main clause actions: in one pattern the action in the subordinate clause procedes that in main clause as "*zentei-joken*", and in the other pattern the action in the subordinate clause simply works as "*zentei-joken*" indifferent to temporal order.

Secondly, "*suru-uede*" has two characteristics: (1) The predicate of the main clause is mainly an adjective concerned with evaluation, (2) The predicate of the subordinate clause is mainly a "volitional verb". Therefore, "*suru-uede*" serves as "*hyoka no sokumen, kanten, kijun*"[the perspective and the norm of evaluation].

Although there have been a lot of studies of "*-uede*" with a focus on temporal relations, we have seen that "*shita-uede*" rather represents "*zentei-joken*" and that "*suru-uede*" conveys no temporal relations since the main clause predicate is limited to that concerning evaluation.

キーワード：接続助詞，前提条件，評価の側面・観点・基準，意志動詞，主体